春の椀

「お連れさんが見えるまでビールでもお出ししますか」
「いや、やめておこう」
「でしたらお薄をお立てしますが」
「そいつはどうかな。少し胃が重いんだ」
「ならば桜湯はいかがでしょう」
桜湯は、花の香りとほのかな塩味が心地よく、身体にすっと馴染んでいくような気がした。
「うまい」
そういうと女将は満足げな微笑を浮かべ下がっていった。着物のすそ模様にも桜が舞っている。見れば床の間には季節の歌を書いた軸が掛かり、杜若が朝鮮唐津の壷に勢いよく生けられている。来るべき季節を呼びこむ茶人の心憎いばかりの演出であった。
中沢が柳橋を選んだのは、相手が秘密をほのめかしたためである。
料亭とは祖父の代からの付き合いで、普段はごく私的な集まりにだけ使っていた。高速に乗れば銀座あたりからもわずかな時間でやって来れ

る。その昔はここから吉原まで船で下ったというが、それはもちろん祖父の頃の話であろう。その後、新橋が栄えるに伴って柳橋は廃れ、戦災によって残る料亭も数える程になってしまう。今では表の問屋街を知る者はあっても、遊び場所に柳橋を思い浮かべる者はいない。しかし、その隠れ里のような場所こそが柳橋の魅力だった。

中沢はこの三月に自分の会社を潰していた。中堅のいわゆるゼネコンで、ご多分に漏れずバブルの頃の土地投機が致命傷となった。先々代から支えてくれた銀行も今回は自分の身を守る方に精一杯で、頭取が頭を下げてくれても追加の融資が出て来る事はなかった。三代目と嘲けられるのはわかっていたが、中沢はあっさりと民事更正法の適用を申請した。百数十億の負債もこの頃同じように倒産した大手ゼネコンのお陰で大きく取り沙汰されることはなかった。

血肉を注いだとまではいわないが、中沢にも自分の企業への思いはあった。

祖父は土方人足を集める口利き屋から身を起こしている。父はその苦労を知る故にさらに会社を伸ばしてきたが、仕事一辺倒の祖父とは違い、どこか一点冷めた所を残していた。後年、妾を何人もこしらえて喜んで

いた祖父に対し、通人として世間に認められるだけの精神面の豊かさを求めたのである。偉かったのは若い中沢に大人の遊びを教えたことである。遊びはけして悪いものではない。いけないのは悪い遊びである。中沢はこの教えのお陰で世に得がたいものを得る事ができた。しかし、財界人としても趣味人としてもついに父親を超えることはできず、結局この半端な所が三代目の悲しさなのであろう。

「いやいやいや、遅くなりましたな」

大坪は勧められもしないうちに上座に廻るとどっかと腰を下ろした。上着を脱ぎ眼鏡を外して禿げ上がった頭部をおしぼりで拭う。

「タクシーがなかなか捕まりませんでな。女将、ビールを頼むわ」

この不景気にタクシーが捕まらない…。中沢がそう考えていると、大坪は運ばれてきたビールを女将の手からもぎ取るように奪い中沢に差し向けた。

「ささ、ま、ひとついきましょうや」

長年議員秘書を務めているだけあってひどく手馴れた仕草だった。

「今日は急な話で申し訳ありませんでしたな。先生からとても重要な話

ということで託ったもんで。ああ女将、あとビール二本とお酒もってきてちょうだい」
菜の花の向付を放り込むように口に入れるとくちゃくちゃと咀嚼しビールで流し込んだ。
「しかし、中沢さんも今回は大変でしたな。もう整理はつきましたか」
「あとはもう裁定を待つだけです」
「ご自分の財産とかはどうされたんですか」
「ほとんど何も残らないでしょう」
椀の中の海老真薯は箸で突付き回されて粉々に砕けていた。清んだ汁が白く濁る。大坪はそれを音を立てて啜った。
「うーん、これはうまいもんですな。ついでにこっちもいきませんか。おっ、これはいい酒だ。燗つけたらもったいない。女将、こいつを冷やでもってきてくれ」
刺身はアイナメの焼き霜づくりとなっていた。皮を一度炙って氷水で冷やし身との間のうまみを引き出している。醤油からは豊かな胡麻の香りがした。
「すいませんが、一服つけさしていただきます」

大坪は左手で猪口を傾けながら煙草の煙をせわしなく吐き出す。強い臭いで繊細な刺身の味がわからなくなった。
八寸は魯山人好みの皿に春蘭が添えられ、そら豆、鮑、キャビア、新蓮根、煮穴子が品良く盛られていた。味覚に変化を持たせるため調理には工夫が凝らしてある。
「で、先生のお話というのは」
「おお、そうでしたな」
大坪は猪口を置くと勿体つけるように座りなおした。
「中沢さん、落ち着いて聞いてくださいよ。明日あなたに逮捕状が出ます」
「…罪名は」
「特別背任」
「…なるほど」
大坪は手酌で酒を注ぎ直した。
「しかし、安心してくださいよ、中沢さん。うちの弁護士が調べた限りでは、立件はできないだろうという話です」
大坪はまた酒を注ぎ直した。

「つまり、当局の狙いはあなたじゃない。うちの先生だ。そういうことです」
大坪が秘書を務めている政治家とは先代からの付き合いだった。政治資金規正法で企業献金が制限されたため、最近では政党宛ての個人献金に切り替えられている。しかし、大量の資金を提供するためにはもっと別の方法が取られていた。それが業界の常識だった。
「資金の流れを辿れるだけの証拠は残っていますか」
「いいえ。でもそれはそちらも工夫されていたのでしょう」
「当然です」
大坪はさくら鯛の焼物を突付いていた。大坪の箸にかかるとなぜか鯛の身は細かくちぎれ皿の上に乱れ飛んだ。崩れた身と皮と骨が皿の上に醜い山を作った。
「信用しますよ、中沢さん。すると残るはあんたの口だけだ。よろしく頼みます」
大坪には先ほどまでの愛想は微塵もなかった。つまり、これがいいたくて来たという訳だ。逮捕状の話を聞きながらも中沢は妙に落ち着いていた。これでこいつらとは縁が切れる。倒産も役に立ったという事か。

面倒になったのか大坪は箸を投げ出すと酒をあおりすぐに立ち上がった。
「ままま、今日はこちらで。お見送りは結構です。誰かに見られてもいけませんしな」
大坪は中沢を片手で制し襖を開けて出て行った。中沢も送る気はなかった。
「お連れ様はお帰りになりました」
女将が戻って来た。
「しかし、いやな奴でしたね。あっ、いえ、これは坊ちゃまだから申し上げるんですよ。今ちゃんと塩撒いておきましたから」
「だが私も、もうしばらく来れそうにない」
「存じてますよ。初めてだと思いますか、そんな話。今まで何人のお得意様が会社を潰した事か。そうだ、最後にご飯は召し上がりますか」
「いや」
「では、お吸い物だけでも」
女将が運んできたのはどうという事のない若竹汁であった。しかし、塗りの椀の中で汁はどこまでも清んでいた。竹の子、わかめ、だしの香

りが一体でありながらそれぞれの孤高を保っている。それを食らう人間の腹わたのことを考えて中沢は苦笑した。もうしばらくこんな物と縁はないだろう。

「実は、今度お渡ししようと思って用意していた物があるんですよ」

女将が差し出したのは古備前の徳利だった。以前一輪挿しに使われていたのを誉めた記憶がある。

「いいのかい」

「もちろん」

窯に入れた時の藁の灰がこびりついて火事場から拾ったような風合いがある。中沢は今の自分にふさわしいような気がした。

「いつでもまたいらしてくださいね」

「ああ、また来るよ」

中沢は、自分のことばに嘘はないと思った。